

季節を詠む、  
時流を詠む

四季の歌

美野里短歌クラブ

寒の夜の花火大会気になれど見に行く元氣吾にあらざり  
 昼さがり白鳥が五羽大寒の遠州池に静かに浮ぶ  
 感染者減りし日々ありよろこべど六波のコロナ恐怖となりぬ  
 亡き母の短歌の本を読みとけば古書の香りのほのかにおう  
 庭隅に咲きはじめたる福寿草朝な夕なにのぞき見るなり

小川短歌会

雪中にあえかなる黄の福寿草みつけし朝よきことあらむ  
 働けるうちが「花」だと古い友は脚ふんばりて畑を耕す  
 冬ざれの野面吹く風に障る音黒き桐の実はさみしくて鳴る  
 露のとう椎茸人参自家生産手作り料理やっぱりうまいね

玉里短歌会

夕空を成田へ向う機影一つ帰国入国の人を思いぬ  
 春来しに乾く西風吹きすさぶ肌に冷たく冬より寒し  
 冬ざれの山よりふわりと花のごとパラグライダーは風に乗りたり  
 スーパーの閉まる間際に駆け込んで総菜を買う我が離れ技  
 降り積みし落葉の土はやわらかく木々をつつみて芽吹きを待てり

寄稿

道路ぞい雑草の中お花咲く



深	高	松	野	石	鶴	根	幡	石	中	白	碓	宇	菱	菱
作	田	田	口	橋	町	本	谷	田	根	根	谷	都	沼	沼
茂	久	通	初	吉	文	智	啓	は	良	清	き	和	友	清
登	子	喜	江	生	男	恵	子	江	子	香	え	子	江	子

みづうみ俳句会

この春を見せたき子らの大川小  
 コロナゆえ曾孫を抱く手もためらいて  
 枝のもつれほどきてさすは雪柳  
 春風を背平にうけて回覧板  
 陽をあびてラツパ水仙勢ぞろい

みのり俳句会

黄水仙先を競いて咲きにけり  
 春光を浴びて車を押す日課  
 水鳥や番で残す水輪かな  
 探梅の心もちて歩を伸ばす  
 冬至すぎ月日の過ぎる早きかな

櫻の会

啓蟄やむずむず疼し葉指  
 花に酔ひ吟行遊び人に酔ひ  
 花満開話ころころ転がりて  
 白球にざわめく春の甲子園  
 花一分杖の集まる日の予定

くるみ俳句会

霞浦かなた牛久大仏臍めく  
 荒野原頭揃えて土筆群れ  
 眼下には霧の柵引く春野かな  
 筑波嶺に春のしぐれや師の遺詠  
 一瞬をいくつも繋ぎ椿落つ

玉里俳句会

料峭や花は戸惑ふ人疎ら  
 枝垂れ桜見上げる人を包みけり  
 遠蛙紫煙くゆらす夕日中  
 花の寺参る赤子の緋の産着  
 花見などの余裕の持てぬ現職時

小美玉川柳会

シルバーのわたしや毎日ゴールデン  
 小麦粉の値上げて薄着エビフライ  
 ミ子コロナ終点何処と子に聞かれ  
 コロナ菌共に仲良く花を愛で  
 寿命とは誰が決めるの不摂生

小	橋	石	阿	江	長	野	鶴	齊	小	大	信	小	岡	村	塚	岡	白	長	長
林	本	井	津	戸	谷	口	町	藤	玉	曾	原	原	島	田	田	島	根	島	島
岳	昇	昭	忠	忠	光	初	文	富	知	工	菊	小	小	妙	忠	禮	清	喜	美
悠	丘	夫	強	男	男	江	男	子	子	宣	村	夜	夜	進	子	子	香	代	奈